美しい傷

すけなが

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
美しい傷

【Ｎコード】
Ｎ９４３９Ｕ

【作者名】
すけなが

【あらすじ】
彼女は美しい傷を持っていた。そして僕にも美しい傷を残した。
でも、それは、僕にとってほろ苦い思い出だ。

（前書き）

美しいものについて考えていたら、ふと思いついたことと過去の記憶が重なって、一気に書いてみました。書き終わったと、これって意外に純愛だったのかなあ、なんて馬鹿なことを考えてしまいましたが……。ご感想いただけたら、うれしいです。

避けては通れない道。
人生のある時期において、僕はそんなものに出合ったことがある。もうずいぶんと昔の話になるけれど、二十代前半から三十歳くらいまでの僕は、なぜかしょっちゅう夜の風俗店に誘われていた。
もちろん、断るという選択肢だってあった。でも、誘われた相手が自分のお得意先だったりすると、無下に断ることなんてできなかった。同じ釜の飯を食う。これを態度で示す必要があった。
誘われるたびに僕は風俗店に行き、金だけ払って何もしなかった。「信じられない」という人もいるだろうが、本当のことだから仕方ない。したくないことはしたくない。まあ、そんなわけで、夜の風俗店というのは、僕にとってあまりありがたい存在ではなかったのだが、ひとつだけいいこともあった。
忘れられない思い出ができた。
社会人になってようやく二年か三年が過ぎようとしていただろうか。営業マンにとって最も大事なものは人脈だ。毎日そんなふうなことを社会から教わっていた頃のことだ。
僕と得意先の課長はしたたかに酔っていて、最終電車はとっくに終わっていた。
「どうしようか？　これから」
課長はなんだか嬉しそうだった。
「どうしましょうか？」
単なる相槌。これからどうなるかなんて、なんとなく予想ができた。曲がりなりにも、社会人になって二、三年。あとは予想が外れてくれることを祈るしかなかった。
「俺、いい店知ってんだけど、君も行く？」
予想通りだった。課長の財布から一枚の紙切れ。下着姿の女。こちらを誘うような笑み。そこに携帯電話がぬっと差し出され、画面

にはすでに目的地のビルが表示されている。
「タクシーをつかまえてきてよ」
課長にとってはすべて予定通りだったのかもしれない。僕は「少しお待ちを」と駆け出すしかなかった。料理が不味いと知っている店に、相手から楽しそうに誘われた時の気分。そんな気分を笑顔で隠しながら。
僕と課長はタクシーで目的のビルまで行き、一階の入口で予約を確認し、前金を払い、エレベーターで地上四階まで昇った。フロアは薄暗く、いくつものパーテーションで区切られていて、僕と課長はそれぞれの小部屋へと案内された。
ぱりっとしたシーツからは洗い立ての香りがした。僕はベッドに腰掛け、ゆっくりと部屋を眺めた。ベッドのほかには枕と灰皿、それにハンガーとゴミ箱しかなかった。なんだか朝までぐっすりと眠れそうな気がした。
ほどなく真っ赤なキャミソール姿の女の子がやってきて、僕からよれよれのスーツを丁寧に剥がし、きちんとハンガーに掛けた。彼女は僕のとなりに座り、袈裟懸けにしたクマのポシェットから煙草と携帯灰皿を取り出した。部屋にも灰皿はあるのに使わないなんて、きっといろんな理由があるのだろうと思った。
「わたし、ビール、のめる？」
耳慣れないアクセントで彼女はそう言い、僕は財布を取り出して
「いくら？」と聞いた。
「ひとつ、ローピャクエンね」
女の子は千二百円をクマのポシェットに大切にしまいこむと、いったん部屋を出て行き、缶ビールをふたつ持ってきてくれた。彼女がプルトップを開けてくれたが、なんだか初めてやるみたいな手つきだった。
「カンパイ」
女の子はぐびぐびとビールを飲んだ。なんだか無理をしているようにも見えた。彼女には急ぐ理由がいくらでもあるに違いなかった。

「フウ」と息ついてサンダルを床に転がすと、彼女はベッドに足を上げ、それからゆっくりと両膝を立てた。白いパンティーだった。フリルも何も無い極めてシンプルなパンティーだ。それは彼女にとてもよく似合っていた。彼女のためだけにこしらえられたものだとしても、何の不思議もなかった。

「ゴセンエンよ。イイコト、はじまるよ」

僕はイイコトについて熟慮に熟慮を重ねているふりをした。でも遅かれ早かれ、僕は彼女に真実を告げなければならなかった。それは、早いに越したことはなかった。

「ごめん。もう二千円しかないんだ」

目を細めて財布の中の真実を確認したあと、女の子は少し悲しそうに鼻から息を漏らした。それでも、彼女は立ち去る気配を見せなかった。僕は煙草に火をつけ、煙の行方を追いかけた。早く気がついて欲しかった。

――もう用事は済んだはずだよ。

もしこの世にテレパシーというものが存在し、もしクマのポシェットからそれが出てきて二千円であったとしたら、僕は迷わずそれを購入したと思う。

ぼんやりとしている僕の膝にふわりとした感触が伝わった。赤いキャミソールだった。

僕はそっと女の子の方を見た。彼女の肌は透き通るように白くてほんのり蒼かった。暗闇の中で、彼女はうっすらと光って見えた。パンティーよりずっとずっと白かった。

「ここ、ちょとイタイ」

女の子は左の乳房を指差した。僕の胸がとくんと揺れた。まだ何もしていないはずだった。彼女は右手ですくうようにして左の乳房を持ち上げた。生まれたばかりの三日月のような、一〇センチくらいの傷がある。たったいま縫合を終えたように赤く腫れていた。

「ここきて、まだニツキよ。でも、ビョーキなちゃった。きのう、きって、むすんだよ」

彼女に言うべきことは何もなかった。まさか「それじゃあ、きちんと休まないと」とは、とても言えなかった。
「わたし、まだ、おカネない。ビョーキしてしまた。いぱい使た。でもビョーキなおす。でも、おカネない」
女の子は僕の右手をつかみ、僕の手のひらを自分の左の乳房へ被せた。彼女の肌にはつるりとした触感があった。思ったよりも温かかい。ビールのせいかもしれなかった。
「わたし、おカネない。あなた、おカネない。でも、おはなし、タダね」
女の子は話してくれた。どこからやってきて、なぜ東京にいるのか。おカネができたらどうするのか。いつ帰るつもりなのか。話している間、彼女は僕の手をずっと自分の乳房に被せたままだった。まるでそうしていると、ビョーキが少しよくなる。そんなふうに信じているようにも見えた。
女の子が自分には十二人の兄弟がいると話し始めたとき、クマのポシェットが震えた。彼女は携帯電話を取り出すと、僕には通じない言葉で会話し、少し顔を歪めたあと、電話を切った。キャミソールを頭から被り、サンダルを履いた。彼女は、まだそこから立ち去りたくない、という顔をしていた。
「ちょっと、まてて」
いったん部屋を出て戻ってきた彼女の手には、缶ビールがひとつ。
「これ、タダね。あなた、おカネない」
ドアがそうっと閉められた。彼女はもう二度と戻ってはこなかった。僕はそのよく冷えたビールを胃に流し込んだ。それまでに飲んだどのビールよりも旨く、とびきり苦かった。
そして、僕がもしあと五千円持っていて、もしそれを使っていたら、と考えた。あの女の子は幸せになれたのだろうか、少しは彼女のビョーキを治す助けになったのだろうか。そんなふうにくよくよと考え続けながら、結局僕ははっきりしない曇り空の朝を迎えた。
あれから、もう十年以上が過ぎ、夜の風俗店に行くこともなくな

った。誘われることも、断ることもなくなった。
でも、僕はときどきあの蒼白い肌の女の子とよく冷えた缶ビールのことを思い出す。僕より生きることについて懸命なあの女の子と僕を朝までくよくよさせ続けたあの苦いビールのことを。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9439u/

美しい傷

2011年7月24日03時16分発行